

大学構内のケヤキの大木の下で、数羽のハトが地面をしきりについばんでいました。まだ早春で、地表には昆虫や草の芽などの餌が少ない時期です。そのためハトたちは、落ち葉や土の間に混じる小さな木の実を探して食べています。ここで彼らがついばんでいるのは、ケヤキの実（種子）です。ケヤキの実はとても小さく、地面の土や砂に紛れてしまうため、人の目にはほとんど目立ちません。しかしハトたちは、地面に落ちた小さな粒を見分けるのがとても得意です。

ハトには「地面から少し出っ張っているものを、とりあえずついばんで確かめる」という習性があります。小石でも種でも、とにかく突いてみて、食べられるものなら飲み込むという方法で餌を探しているのです。人には見えにくいケヤキの実も、ハトの目にはしっかり見えているのでしょう。

冬から春にかけては、野鳥にとって食べ物が少ない厳しい季節です。こうした木の実や種子は、貴重なエネルギー源になります。大きなケヤキの木の下は、落ちた実が集まるため、小さな「食堂」のような場所になっているのかもしれない。ハトたちは地面を歩き回りながら、静かに春までの糧を探していました。

